2010 年 12 月 23 日

博士学位論文審査報告書

大学名　早稲田大学
研究科名　人間科学研究科
申請者氏名　服部等作
学位の種類　博士（人間科学）
論文題目　玉座の「カタ」と「カタチ」
“Kata” and “Katachi” of the Throne
論文副題　メソポタミアの紀元前３千年紀における玉座の研究
Study of the Throne in the 3rd Millennium B.C. in the Mesopotamia
論文審査員　主査　早稲田大学教授　蔵持不三也　博士（人間科学）（早稲田大学）
副査　早稲田大学名誉教授　野呂影勇　工学博士（慶応大学）
副査　早稲田大学教授　寒川恒夫　学術博士（筑波大学）
副査　早稲田大学教授　店田廣文　博士（人間科学）（早稲田大学）

本論文は、主にメソポタミア文明初期の前 3 千年紀を中心とし、さらにそこから派生したと思われる玉座について、とくに「カタ」（姿勢）と「カタチ」（形態）の 2 要素に着目しながら、その歴史的・社会的・象徴的な発展・変容過程を、著者が 30 年以上もの長きにわたって調査・収集してきた一次資料、とくに神殿壁画や印章における図像表現や象形文字に基づきつつ追究するものである。さらに本論文で、著者は古代メソポタミア人の座具と座位に目を向け、玉座の座位と民衆の座位についても分析している。

本論文は序論において概要と構成を述べたあと、第１章「玉座の《カタ》と《カタチ》」において、まず人口に膾炙している玉座が本来どのようなものであるかを、東ー西アジア世界の代表例として、アケメネス朝ペルシャのダレイオス一世の玉座と、日本の国宝で「赤漆欟木胡牀」と呼ばれる正倉院の御椅子を具体的に取り上げて論じている。中国唐代にペルシャ系民族を指す呼称「胡」がついているところから、この椅子はおそらくそこからシルクロードを経て伝来したものだという。事実、この胡牀とダレイオスの玉座は、外観が四脚の支持構造や背板（凭掛・よりかかり）をもつ点で共通している。だが、その座法、すなわち姿勢の「カタ」は異なっており、前者が胡座（あぐら）で、座面に平座（直接肌を接する座法）であるのに対し. 後者のそれが足をたらす垂足而座で背板に身をよせる倚座姿勢をとる。この相違点が何に由来するかは定かでないが、前者が明治時代に修復が施されたものの、なお原型を保っているのに対し、後者の原型は浮き彫りにのみ残っているにすぎない。いったいに古代の玉座は、人為的破壊と経年変化ゆえにその現存例がほとんどなく、それに関するま

とまった記録も見あたらない．研究を困難なものにしている所以だという。

こうした資料上の瑕疵を補うための手続きとして、著者はまず玉座に関する象形（甲骨）文字に着目する。たとえば姿勢を表す「座」や「立」、「臥」、「倚」、「跪」といった文字・語形である。特に「座」と「倚」の象形は、玉座を考察する上で重要だという。すなわち、象形の「坐」（座）は、神に伺いをたてるため向き合う二人が低い平座姿勢を象ったものであり、神に伺う神聖な(訴訟)場の座姿勢の象徴的表現である．一方、「倚」の象形は、人をあらわす偏に大刀を添えた形で権力を象徴する．この語形からすれば、それは刀や玉座に「身をよせる」倚座姿勢を表していることになる。むろん権力を象徴するには、玉座の座面(席)や背板、肘当て、足台ならびに王杖(太刀・槍)、王冠といった威儀具が必要となるが、さらにそこには象徴的な姿勢の「カタ」および玉座の「カタチ」も不可欠となる。こうした象形の初義と初形は、時間（古代・現代）と空間（西・東アジア世界）を超えて、玉座にかかわる姿勢の形態的分類を行う本研究にとって重要な役割を担っている。

玉座の先行研究は少なからずあるものの、その多くは「カタチ」を重視するあまり、「カタ」に関する言及がほとんどみられない。たとえば新石器時代の代表的な出土品や遺構にチャタル・フユックの地母神座像――その正確な位置づけはなおも不明――や、より後代のツタンカーメン王の玉座、新アッシリア帝国の玉座などがあるが、これらに関する研究のほとんどは、倚座姿勢をとる玉座という側面を見逃し、「豪華な椅子＝玉座」とする一種の物質文明観に陥っているといわざるをえない．

第1章ではまた、作業仮設として、玉座の「カタチ」のみならず、「カタ」を玉座が神（天）に通じるよう高いところから下（民衆など）を睥睨するための座姿勢とする。すなわち、世界最古の文明の地メソポタミアでは、旧約聖書のバベルの塔の原型とされるジグラッド（聖塔）にみられるように、神に近づくために天を指向した神殿建築を進め、その神殿内部の玉座にも同じ指向をもつ「カタ」と「カタチ」があるのではないかとする。

「姿勢と形態的研究」と題した第2章では、メソポタミアやエジプトの神殿彫刻や地母神、スツール（腰掛け）をはじめとする考古学的出土品、さらに古代中国の造形表現などにおいて、正座や跪座、投げ足、胡座、結跏趺坐、平座、立位、倚座、臥位といった座姿勢がいかに描写されているかを通文化的に考察する。著者によれば、たとえばトルコ最大級の新石器後期遺跡であるチャタルフユックで出土した、前6500～6000年代前半頃の作とされる地母神とおぼしき土偶の座姿勢は「倚座」であり、この「カタ」は北西インドの仏教美術に登場する蓮華や経典を持つ菩薩像や、その眷属で、金剛杵を持つ執金剛神像にも普通にみられるという。さらに著者は、これらの座姿勢が表現された玉座やスツールの「カタチ」を子細に分析し、そこに天＝神・王／天下＝民衆という象徴的な世界観や統治観を読み取ることができるのではないかと指摘する。

第3章の「印章にみる玉座の《カタ》と《カタチ》」では、著者はこうした仮説を検証する方法として、主に（円筒）印章の造形表現を検討する。改めて指摘するまでもなく、印章はすでに前5000年頃からメソポタミアを中心に長期間かつ広域的に継続して大量使用さ

れたが、当初計数手段として登場したそれは、次第に特別な王や神の座像や立像、饗宴、動物闘争、神話、日常光景、さらには玉座に座った王の謁見を主題とするようになった。とりわけこの玉座を刻んだ印章からは、「カタ」と「カタチ」のありようと玉座自体の変容過程がわかる。後に玉座は楔形文字の銘文が加わって、登場人物や神、信仰様式さえも教えてくれるようになる。その限りにおいて、印章は玉座に関するさまざま情報を提供する資料となっている。

そこでは、前 3 千年紀のメソポタミアに登場する玉座の発展過程とそれに伴う座像の変遷が、詳細な具体的な事例をあげて考察されている（以下の時代区分は筆者による）。まず、前 4 千年紀末期から前 3 千年紀初頭の I 期には経済活動が都市に集まり、印章にもその活発な活動を反映した単独ないし群像の座像表現が見られるようになるという。そこにはまた巫女や祭祀王が登場し、スツール（小椅子）の上に片立て膝の平座像や腰掛けで見下ろす視点と独立性をもつ座像も表される．しかし、この I 期には本格的な銘文がなく、スツールも特別な性格の人物が用いた玉座の性格を有する席にとどまる。

前 3 千年紀初頭からアッカド朝が成立した前 2344 年までの II 期はいわゆる都市国家の時代で、印章の座像表現に銘文が加わる。この時期の重要な座像表現は、前 2600 年頃のメソポタミア南部ウル王墓群から出土した王妃プ･アビの銘がついた饗宴図に現れる。王妃の座像は、座面より少し上に延びた背板に上半身を寄り添わせた正面向きの姿で、他の人物より大きく表現されている。また、同時期のウル王墓出土の旗章に登場する王とおぼしき人物の座像は、付属物に足台がつき、両足を垂下し正面向きの座姿勢をとっている。これら 2 座像は、座面がスツールより高いため、高い視点から下を見下すことができる座姿勢となる。

II 期の印章の主題としては饗宴図や動物闘争文があるが、プ･アビは玉座の性格を備えた椅子に座っている．ここから筆者は、この座像が天との交流や来世への旅立ちを託した表現と推定する。同時代のエジプト古王朝の座像にも類似性が見いだせるからだという。

III 期は前 2334 年からウル王朝が滅亡した前 2000 年頃のまでで、ウル王朝最後の第三王朝の謁見図に見られる座像には、王が自らを神と宣言する場面が描かれている。おそらくこれは王権が強化されたことを示す。こうした謁見図の玉座像には、守護神（時に王）が上半身を支える高い背板や肘当て、下肢を安定する足台が加わっている．威儀をただし身を寄せる倚座姿勢である。ウルナンム王法典碑に見られる玉座の主は、王権を象徴する王杖、王冠、王環を持ち、同時に威儀を正した正面向けの倚座姿勢をとる。この時代の印章図像の玉座は、神殿の門や階段状の建築様式を摸していて、神殿前に玉座を設け、有翼の神殿の門を表現している。そこには神殿をして天に通じさせようとする建設者の意図が示されている．基壇上に設けた玉座で正面に向く王（ないし神）の倚座姿勢は、象徴性のみならず、足台や基壇が天に通じる階段となっていることを暗示す。だが、前 3 千年紀後半、ウル第三王朝はイビ・シン王を最後に滅び、シュメールの文明が終焉すると同時に群雄割拠の時代に入り、天を指向した都市の神殿建築も要塞化にむかうようになるという。

本論文の「結論」は、以上の考察をその方法論ともども要約し、玉座の「カタ」と「カタ

チ」を注目することにより、その発展形態や分布ないし普及がつねに天と関わる王権思想と不可分に結びついていたと指摘する。そして、こうした玉座を表象とする神＝王一体観や統治観が、メソポタミア文明の前3千年紀に形作られたとする。すなわち、「カタ」は自ら神と称した王権の頂点にたつ王が神として威儀をただして玉座に身を寄せ、高いところから睥睨する倚座姿勢であり、「カタチ」は天に通じる神殿を摸した玉座で、両者は王権の拡大化ともに発展したというのである。そしてこの「カタ」＝「カタチ」対合はIV期以降に充実期にむかい、特にVI期（前1000～500年）の新アッシリア帝国の玉座において究極の様態をとるようになった。そこでは玉座が足台や基壇を常に備え、階段の役目を意識した足台とともに天に向かう神殿のようにそびえたつ独立した装置となり、以後、直接的ないし間接的に各地の玉座に影響を及ぼすようになるという。

なお、本論文（一部を含む）が掲載された主な学術論文は以下の通りである（2000年以降分）。

（1） 服部等作「天上と天下の玉座－ウラルトゥと新アッシリア帝国の玉座」（単著）、『天空の神話』（篠田知和基編）、楽浪書院、2009年4月、43－62頁。

（2） 同「中央アジアのソグド人虞弘墓にみる饗宴と楽園の図像」（単著）、『神話・象徴・文化（III）』、楽浪書院、2009年4月、277－290頁。

（3） 同「王の座と玉座のカタチ」（単著）、《姿勢と研究》、第32号、2008年6月、44－51頁。

（4） 同「玉座を支える有翼神獣－ウラルトゥ王国の玉座における天空と地上世界の交流」（単著）、『神話・象徴・文化（II）』、楽浪書院、2007年5月、171－183頁。

（5） 同「古代メソポタミアにおける初期のスツールと床座人物像の研究」（単著）、《デザイン学研究》、第51号、日本デザイン学会、 2005年、 9－16頁。

（6） 同「スツールと床座像に現れた玉座の性格－古代メソポタミアの印章図像にみる初期の玉座について」（単著）、《芸術研究》、第15号、広島藝術学会、2002年10月、43－56頁。

（7） 同「食の風景－宴の演出と造形、食の光景と床座の文化」（単著）、《アジア遊学》、第14号、勉誠出版、200年3月、111－128頁。

（8） 同「玉座考」（単著）、《SD・スペースデザイン》、第23号、鹿島出版会、2000年7月、82－87頁。

以上、縷々みてきたように、本論文は古代メソポタミア社会における玉座の造形表現に着目し、その「カタ」と「カタチ」の実例分析を通して、古代王権の統治原理は単に政治のメカニズムだけでなく、玉座の形態とそこに座する王の姿勢に仮託された象徴性にもあったとする。このような実証的な視座と指摘は、その作業仮説ともども、従来の王権論や政治史、あるいはメソポタミア史学や美術史が看過してきた点でもある。さらに、ここで考察された王権論や座位の意味、古代社会の日常生活、神話・伝承などは、文化人類学や

歴史学、人間工学、美術史など、さまざまな学問分野に資すること大なるものがある。本論文の学問的意義はまさにここにあるといえる。

以上のことに鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認めるものである。

以上